

ドライ系薬学領域の学会誌からみるディシプリンの動向と課題

History and current status of discipline in “dry” pharmaceutical sciences field in Japan: An analysis of their societies’ journals

○寺岡 章雄, 津谷喜一郎

東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学

目 的

学問発展の構造では, 新しいディシプリン(discipline, 学問領域)を切り拓くパラダイムが学問のスタイルを定め, 知的集団の専門的, 職業的活動を正当づけ, 規準化された(normatively defined) 学問のその後の発展コースを規定する¹⁾²⁾。薬学領域における新たなパラダイムともいえるドライ系薬学研究は, 広くは医薬品の合理的使用(rational use of drug: RUD)につながる研究であり, 広く社会系薬学や臨床系薬学の非実験系研究を包含している。ドライ系薬学領域の学会で発行されるジャーナルである学会誌の内容を分析し, これらのディシプリンの歴史, 現状, 課題について明らかにする。

方 法

Table に示すドライ系薬学領域の9つのジャーナル³⁾を対象として, 閲覧できなかったわずかの号を除き, ほぼすべての号に目をとおり, 歴史的発展, 現状と薬学全体の中での位置づけ, 今後解決すべき課題, の観点から分析した。

結 果

(1) 対象としたジャーナルとその発行母体である学会などの概要

ドライ系の最初の学会として1954年に創立された日本薬史学会が1966年に創刊した**薬史学雑誌**には, 新たな総合科学としての薬学の発展を希求する論文が掲載されてきた。分業元年とされる1974年頃から医薬分業の進展による社会的ニーズに応えドライ系薬学研究が活発化し, それを行う研究室(ドライラボ)とそれらをつなぐ学会とジャーナルの数も増え始めた。Table に示したジャーナル9誌は, その名称と発刊年そのものが, ドライ系薬学のディシプリンの動向を示している。

Table 対象とした雑誌とその発行母体である学会などの概要

学会名	創立年	会員数	ジャーナル名	創刊	最近号	頻度(年)	原著	Online
1) 日本薬史学会	1954	300名	薬史学雑誌	1966	47(2)	2	+	Medical Online
2) 日本薬学図書館協議会	1955	大学56館, 企業51館	薬学図書館	1956	58(1)	4	-	J-STAGE
3) 日本社会薬学会	1982	450名	社会薬学	1982	31(2)	2	+	J-STAGE準備中
4) 日本薬剤疫学会	1995	400名	薬剤疫学	1996	17(2)	2	+	J-STAGE
5) 日本医薬品情報学会	1998	800名	医薬品情報学	1999	14(4)	4	+	J-STAGE
6) 日本ファーマシューティカル コミュニケーション学会	2003	180名	日本ファーマシューティカル コミュニケーション学会誌	2003	10(1)	2	+	-
7) 日本薬局学会	2007	1,900名	薬局薬学	2009	4(1)	2	+	-
8) 日本アプライド・セラピューティクス学会	2009	300名	アプライド・セラピューティクス	2009	4(1)	2	+	-
9) レギュラトリーサイエンス学会	2010	1,000名	レギュラトリーサイエンス学会誌	2010	3(1)	3	+	-

(2) ジャーナルの内容と特徴

- 薬史学雑誌** 日本薬史学会は, 薬に関する歴史の研究が日本の薬学の発展に貢献をすることを目的としている。揺籃期ドライ系薬学の原著掲載の受け皿となるとともに, 薬学各領域の位置づけ, 方向性を明らかにする重要な役割を果たした。
- 薬学図書館** 日本薬学図書館協議会は, 薬学図書館事業の振興を図り, 薬学教育および研究に寄与することを目的とする。原著掲載はない。この種の学術雑誌がまだない中で, 新たなドライ系薬学のディシプリン形成についてその揺籃期の動向を伝え, 方向性に寄与した。
- 社会薬学** 社会薬学は, 医薬品の合理的使用に関連してそれらの社会的管理制度など医薬品の社会的側面をめぐる諸問題を総合的に研究する。扱う対象が広範囲にわたるため, 各分野に特化した学会とジャーナルがその後生まれている。
- 薬剤疫学** 薬剤疫学は, 人の集団における薬物使用による効果と副作用について研究する学問である。この学会は国際薬剤疫学会(International Society for Pharmacoepidemiology: ISPE, *Pharmacoepidemiology and Drug Safety* 発行)と連携した活動を進めている。
- 医薬品情報学** 患者の視点からみた医薬品情報のあり方を主眼に, 情報の創出と情報源の構築, 医療の場への伝達, 患者での個別化と伝達, 利用の確認・評価, 結果のフィードバックまでのすべてを対象に, 「医薬情報学」の確立をめざしてきている。
- 日本ファーマシューティカルコミュニケーション学会誌** 同学会は, 患者主体の医療の向上のためには薬剤師のコミュニケーション能力の向上が不可欠とし, その体系づけの研究を行っている。
- 薬局薬学** 薬局と薬剤師の質的向上が求められる中で創刊された。薬局業務を主とする薬学に係る研究成果の発表の場となった。「8カ国における薬局業務と研究活動との関連性分析」(2012)などユニークな視点が注目される。
- アプライド・セラピューティクス** 医療用医薬品, 一般用医薬品のみならず, サプリメントなどの補助的なものも含め, 広く薬物療法がエビデンスに基づき科学的で合理的・経済的な視点から行われることをめざしている。
- レギュラトリーサイエンス学会誌** レギュラトリーサイエンス(RS)は行政科学, 評価科学とも訳され, 科学技術の成果を社会との調和の上で最も望ましい形に調整する。研究方法によってはウェットともなるRSは社会の要請の中で最も必要性の高い分野の1つである。

考 察 と 結 論

- パラダイムとしてのドライ系薬学が確立されるには, それに基づく一定の路線のうえに「通常科学」(normal science)と称される一連の仕事の積み重ねが必要である。だがドライ系薬学研究においてはいまだ明確な塊とはなっていない。各大学などのドライラボの枠を超えたディシプリンとして, 学会と, 学会が発行するジャーナルがある。それらが, このパラダイムがアカデミズムの中で確立するうえで重要な位置を占めるであろう。
- 問題として, ドライ系薬学に関連するこれらの学会やジャーナルの間に横の連絡がなく, 自然成長的にバラバラに発展してきたことがある。日本の薬学が本来の姿である総合科学として大きく発展するためには, ドライ系薬学が根づいたものとなることが必要で, そのためにドライ系の関連学会やジャーナルの交流・連携が望まれる。
- すでに, 日本の薬系大学のドライラボのリストやドライ系学位論文リスト⁴⁾の作成などにより, ドライ系薬学領域のディシプリンの姿を明らかにしようとする取り組みが着手されている。これらの取り組みが一層加速され, ドライ系薬学の, 全体としての薬学への寄与の姿を明確化していくことが期待される。

参考文献 1) 中山 茂. 歴史としての学問. 中央公論社. 1974.

2) Nakayama S (translated by Dusenbury J). Academic and scientific traditions in China, Japan, and the West. University of Tokyo Press, 1984.

3) 寺岡章雄, 津谷喜一郎. 日本の薬系大学における「ドライラボ」の過去・現在と今後の課題. 薬史学雑誌 2012; 47(1): 67-89.

4) <http://www.f.u-tokyo.ac.jp/~utdpm/drylab.html>